

ハイロ通信 From 北区

第 10 号
2021 年
12月10日

発行責任者
泊原発の廃炉をめざす札幌北区の会
共同代表 富田 素實江
北 8 西 3 札幌市エルプラザ 2 階: レターケース 256
TEL 090 - 7644 - 4379 FAX 011-726-7234

寿都町長選挙 核ごみ文献調査前町長が 6 選 町民が町長選挙無効の異議申し出

10月26日、任期満了に伴い行われた寿都町長選挙では、原発から出る高レベル放射性廃棄物(核ごみ)の最終処分場選定の調査に応募した現職片岡春雄(72歳)氏が調査撤回を訴える前町議の越前谷由樹(70歳)氏を破り、6選を果たしました。

選挙結果は、片岡氏が1135票(投票数の55・15%)、越前谷氏が900票(43・73%)で235票の差でした。無効は23票、投票率は84・07%でした。

越前谷氏や支持者団体等は文献調査後の来年10月に行われる住民投票に向けての反対運動への継続を固めています。

また、6選を果たした片岡氏は、選挙結果後のマスコミインタビューで、核ごみの概要調査実施(国からの交付金70億円)に意欲を示しながら、「核ごみ反対の越前谷氏への900票をショック」と受け止めています。

町民5人が冷静に 無効申し出

11月9日、町民5人が公職選挙法に基づき町選挙管理委員会に町長選挙の無効を求める異議申し立てをしました。

申し出では、複数の投票所でこの方法が実施されなか

ったと主張。さらに障害者施設の入居者が投票する際、付き添った施設職員が投票内容を見られる状況だったとして「投票の秘密が損なわれ、自由な意思による投票は期待できなかった」としています。「違法の結果が及ぶ票数は、得票数の差(235票)を上回る」と訴えています。

異議申出人の一人は越前谷氏の後援会長吉野寿彦氏、他の4人も後援会に所属、脱・肌感覚リコールの会の会員です。

12日、脱・肌感覚リコールの会・共同代表の樋谷和幸氏は、「異議申し出は負けた事への後援会員の腹いせのように受け止められておりますが、選挙期間中を問わず相手陣営がやってきたことの情報を集める中で後援会とは全く関係なく行ったものです」と冷静であることを表明しています。

寿都町選挙管理委員会が民主主義に立脚した公正な調査と判断を期待します。

風 声

▼太平洋戦争の始まりとなった1941年12月8日の「真珠湾攻撃」から80年になりました。私は、その2年前の1939年11月に大阪の下町で生まれました。だから、物心ついた幼児期は、まさに戦争のまっただ中、楽しい思い出など全くありませんでした。父は軍医として中国へ出征し、町内会(隣組)は、防火訓練、防空壕掘り、警戒警報、空襲警報で明け暮れる毎日でした。1945年3月には、大

阪大空襲で焼夷弾のあられの中を電車のガード下に避難しましたが、空襲後帰ってみると、一面焼け野原となり、我が家も残骸になっていました。親戚の家を転々とし、最後に奈良県の西大寺に疎開しました。8月6日に、広島叔父が、仕事で出かけていた爆心地で被爆し亡くなり、一家も自宅で被爆しました。▼戦後、小学校2年生で大阪に戻りましたが、市内のあちこちにも皆さんの戦災孤児や傷痍軍人の物を乞う姿があふれていました。私も、いつも腹を空かしていたことしか思い出さない幼児期でした。私の「戦争はいや!核戦争は絶対にいや!」という思いは、このような幼児体験から始まっています。成長とともに「戦争のない世界」、「核兵器廃絶」の実現が夢となっていきます。高校時代には、「原爆ゆるすまじ」の歌を「ふるさとの町焼かれ、身寄りの骨埋めし焼け土に・・・」と、よく歌いました。▼「ハイロ通信」の本号には、宮尾正大室蘭工大名誉教授の「原爆と原発」を掲載させていただきます。原爆と原発は、同じ原理で動き、その恐ろしさも同じものだと、言うことを詳しく述べられています。原発は、原子炉自体が危険で、事故の発生が防げない、核「ミ」が安全に処理できない、運転により核爆弾になるフルトニウムをつくりだすことなど、核兵器に負けないくらいに恐ろしいものです。「核兵器禁止」も「核発電(原発)廃止」も世界の平和と安全のためには不可欠なことです。声を大きく、運動を上げましょう。▼しかし、2015年に安倍自公政権が、安保法制の制定を強行し、「重要影響事態」には、アメリカとともに戦争をしたり、「存立危機事態」には、日本が武力反撃をすることが出来る「集団的自衛権」を規定しました。さらに、岸田政権は、「緊急時・非常時」に国会の法律制定手続きを飛び越して、人権制約の権限を含め内閣に権力を集中するという条項を設置する改憲を声高に叫び、今回の補正予算案には過去最大となる軍事費を計上するなど、「参戦準備」とさえいえる事態を急速に進めて来ています。▼悪夢を見ているようです。このような事態になれてしまうのが、最も恐れることです。「反戦・平和」、「核兵器・核発電廃絶」の声をいよいよ高めなければなりません。

(福地保馬)

3・11から10年

シリーズ【福島を告発する】⑧

～喪失の先のぬくもり～ 井上美和子



講演する井上美和子さん

私達は現実に向き合い続けても
うすく11年になりますね。

原発事故に遭うという事、放射能
の恐怖に慄いた事、数々の残酷な現
実に翻弄される事の「解せなさ」を、
自分の居る場所で、時には遠くの会
場にも駆けつけて、訴え続けてきま
したね。

その声の届かなさに落胆したり、
孤独を感じたりの連続でも、これか
らを生きた子供達や若者を想い、た
くさんの方が、自らの避難体験を伝
える活動に臨みました。私もその一
人です。

講演を重ねる事で、3・11後を生
きる子供達の将来を、多くの方々と
一緒に考えていくきつかけにして
いけるのでは、と考えていました。
ある時、講演後の会場でかけられ
る感謝の言葉に、ハッとします。

私の講演が「興味本位」に聞かれ
ているような不安を感じたのです。

この不安はなんだろう、と、その
問いに深く潜り考え続けると、

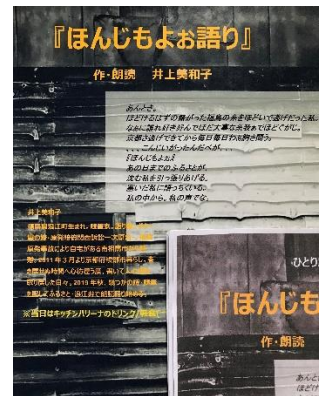
「原発問題は原発事故被害当事者
だけの問題」という安心感を聴衆
に与えてしまったのかもしけれ
ない、という答えに至り、次第に体
験を話す講演の形に不安や疑念を
抱いていきました。

そして、どう他に私の伝え方が
あるのだろうか？と考え続ける日々
が始まりました。

そんな私に転機の鍵を与えてく
れたのが、2017年秋に京都市
で上演された一人朗読劇「線量計
が鳴る(中村敦夫さん)」でした。
感動して、あんな劇の福島の母版
とか、あったらいいなあ、誰かやん
ねがなあ、と思ったものでした。

事故後8年が経った頃。原発事
故で避難した事以外の一切合切を
忘れられてしまいたくない、

土着の福島人の豊かだったかつ
ての暮らしの姿のことを伝えたく
て、2019年5月「故郷の言葉
で」朗読する構想が浮かびました。
原発近隣住民の原発避難の実情
や記憶。その語り辛さに交わる経
験がある私が朗読をする事で、語
れない人の分を伝えられる、と期
待を込めながら原稿を書きまし
た。



2019年9月『ほんじもよお
語り』と題した朗読公演は、京都で
動き出しました。

2021年10月23日に南相馬
市で震災ストレス研究会主催の
「おらもしゃべってみよう」が開
催されました。

私もしゃべって来ました。
地元で朗読する日を夢見て、避
難先の京都で滑り出した『ほんじ
もよお語り』夢叶って感動で珍し
く緊張しましたが、最初だけ。

自分と同じ言葉を話す皆さんに
見守られて、朗読3作品を届ける
事が出来ました。

この日の「しゃべってみよう」
は、最後は輪になって、それぞれの
参加者が、「しゃべってみよう」
が、「しゃべっていいがったな」な会
になった、忘れられない日になり
ました(蟻塚さん、ストレス研究会
の皆さんに感謝！)

夏に延期となった『ほんじもよ
お語り』各会場の講演は、10月の
宣言解除を受け、11月現在順次開

催されています。

とは言え『ほんじもよお語り』は
世界的なコロナ禍に突入した昨年
中でもりもり朗読で、国内外の
方々にお聴き頂きました。

今年4月には「もやい展202
1東京」出演で上京、関東の皆さ
ま、芸術家の皆さんや素晴らしい
作品たちに見守られ、会場で朗読
が実現しました(中筋純さんに感
謝！)

代表作の「豆を煮る」に続き「桜
はどごさ」「隠し球」、汚染水と福島
を描いた最新作「あたりまえ」、ど
んな理不尽をも、穢れのない郷愁
や慕情に溶かし込み、作品を書き
続けています。

近い将来、朗読『ほんじもよお語
り』が皆様のお耳にも届きますよ
うに。

井上美和子さんのプロフィール

福島県浪江町生まれ。文筆朗読

家。原発避難者。2011年3月

12日(土)家族で南相馬の自宅を離

れた。以後現在も京都府綾部市に

避難継続中。私の「喪失の先に浮

かび上がるぬくもり」を書き、2

019年秋、文筆朗読『ほんじも

よお語り』初演。(ラジオ、You

Tube出演、TV取材、映画出演

他)2021年4月「もやい展2

021東京」朗読出演。故郷の言

葉で、福島人の風を送り続ける。

代表作「豆を煮る」、最新作「あ

たりまえ」他

原爆と原発

会長、分かってないのは貴方だ (上)

「原発やめよ!登別の会」(2019年7月21日)より転載 室蘭工業大学名誉教授 宮尾 正大

今(2019)年の2月25日、経団連会長の中西氏は、「原発と原子力爆弾が頭の中で結びついている人に『違う』ということとは難しい」と発言しました^{注1}。そこで本当に原発と原発とは違つてでしょうか?その原理と、生まれ、恐ろしさを考えます。

^{注1} 中西氏の記事は2019年7月に書かれました。

歴史 原子力爆弾

原発や原爆は原子核分裂のエネルギーを利用します。人々は20世紀に入るまで、すべての物質は原子からできている。その原子は原子核と電子からできていて、原子核は決して壊れない基本のものとも考えてきました。

1895年、レントゲンのX線発見、次の年のベクレルの自然放射線の発見、1898年のキュリー夫妻のラジウムやポロニウムの発見により、何か原子核から不思議なエネルギーが出ていることが知られます。また新しい放射線、中性子が発見されます。そして1938年、ドイツのオットー・ハーンにより、中性子を原子核に当てるとウランニウム原子核が分割され、その時強大なエネルギーと複数の中性子が放出されることが発見されました。原子核分裂の発見です。そして翌年3月シラード、フェルミ、イレーヌとジュリー・キュリーによる連鎖反応が証明されました。

時あたかもドイツでナチス政権が誕生し、戦争の火薬の匂いが世に漂い始めました。1935年のニコルンベルグ法で迫害追放されたユダヤ人科学者たちは、安全と自由を求めてアメリカに亡命します。ドイツの大学から原子核物理学の頭脳が大量に流出したのです。アメリカに逃れた科学者たちは、ナチスが核分裂エネルギーを利用した爆弾、原子爆弾を開発することを恐れます。そして有名な手紙が書かれます。アインシュタインも署名したシラードの当時のアメリカ大統領、フランクリン・ルーズベルトに宛てた「アインシュタインシラードの手紙」です。ナチスがチェコを併合した5日後、ポーランドに侵攻する1ヶ月前のことでした。

ルーズベルトは10月11日、ウランニウム諮問委員会を発足させます。1940年4月、ドイツはデンマークとノルウェーに侵攻します。それは原爆開発に欠かせない重水をドイツが手に入れることを意味していました^{注2}。そして1月後、フランスもドイツの軍門に降参します。1941年10月、ルーズベルトは原爆開発を命令します。「マンハッタン計画」の始まりです。1942年12月、マンハッタン計画の1つとして、シカゴ大学のスカッシュボールに350gの黒鉛を使って原子核分裂炉が組み立てられます^{注3}。そこで原子炉で初めてウランの連鎖反応が臨界に達しました。初めての原子炉です。成功の報告は直ちにワシントンDCに知らされます。「イタリヤの航海者が新大陸に上陸。住民は非常に友好的」と。熱出力は電球も灯せないわずか5Wでした。もちろん発電設備もついていません。マンハッタン計画で原爆材料は2つ考えられていました。一つはウラン235、そしてもう一つはプルトニウム239。ウラン235は天然ウランから巨大な質量分離器で選り分け、プルトニウムは天然ウランを重水減速原子炉で核反応させて生産します。

^{注2} 中性子の減速材に使われる。映画「テレマークの要塞はこの事をもとに制作された」。

^{注3} 中性子減速材に使う。日本の原発第1号も減速材に黒鉛を使用。

原子力発電

原子力のエネルギー利用はまず兵器として始まります。隠密行動を求められる潜水艦のエネルギー源として開発されます。1954年、潜水艦ノーチラス号です。燃料を燃やなくても良いので酸素や空気が必要としません。1960年には、航空母艦エンタープライズ号も進水しました。そして世界の原爆による破滅への秒針はますます進みます。

1953年12月8日、東西両陣営の核兵器による睨み合いに、世界は恐怖を覚え、核兵器への批判の嵐が巻き起こります。その対策だったのかもしれない、アイゼンハワー大統領は、国連の演説で「Atoms for Peace」即ち「平和のための原子力利用」を打ち出しました。その裏側には、「反核に対する心理作戦もありました。同盟国の結束を目指す事も目的でしょう。演説の大半、3/4は核兵器についての演説で、アメリカが核兵器をどれほど増やしているか、核兵器の進歩がどんなにすごいのか、とアメリカの核戦力を誇示する内容でしたから。

しかしこの時、アメリカには平和のための原子力施設、原発はありませんでした。そして先を越すのはソビエトでした。演説の半年後の1954年6月27日、ソ連はオブニンスクで最初の原子力発電所を稼働させます。電気出力5千キロワットの黒鉛減速炉です。イギリスも1956年10月17日、コーダーホールで東海原発でも採用したマグノックス型原子炉を稼働させます。出力6万キロワットの黒鉛減速炭酸ガス冷却炉です。

出遅れた米国は焦ったので、原子力潜水艦の原子炉を製作していたWH社は、1957年原潜

原爆と原発

〈3面からの続き〉

用の原子炉を地上用に変更してシッピングポットに発電所を作ります。加圧水型の原子炉でした。

潜水艦は海に浮かんだ船です。揺れもありますし傾きます。このような時、原子炉が水に満たされてないときには燃料が水から出て溶け落ちる危険があります。そのため、炉心では水が沸騰しない加圧水型が適していたのです。これが加圧水型原発のルーツです。

一方、GE社は徹底的なコスト削減を狙い、独自に沸騰水型原子炉を1960年に開発します。コスト削減のため格納容器を切り詰め、圧力増加を抑えるために水を張った冷却室を取り付けた(ご存知のタコ足)原子炉です。

原理

原発や原爆は、私たちの身の回りにあるエネルギーとは異質のエネルギーを利用します。原子核が存在するためには、プラスの電気を帯び反発し合う陽子を原子核の中に閉じ込めなければなりません。これを結びつけている力が「強い力」です。原子核の中では、反発し合うプラスの電荷を持った陽子をこの「強い力」が閉じ込めています。閉じ込めるためには、電荷を持たない中性子も必要になります。これらの素粒子の間で引き合う力が必要だからです。

す。原子核とは、反発し合う陽子とこれを中和する?中性子が入った水袋のようなものなのです。

溢れそうなこれらの粒子がたくさん詰め込まれたウランのように重い原子核は、はち切れて溢れて破れそうな袋で不安定です。ここに新しい粒子が付け足されると、原子核ははち切れます。核分裂です。この時膨大なエネルギーが放出されます。このエネルギーを使うのが原爆であり、原発です。異質のエネルギーを利用すると言う点で、原爆も原発も同じです。

ウラン235は中性子を一つ吸うと不安定になり壊れて2つの原子核に分かれます。核分裂です。このとき壊れると同時に中性子を2つ放出します^{注4}。1つ吸って2つ、それがさらに4つ、8つ、16と倍々ゲームが始まります。生まれた中性子は使われないまま外へ逃げるものがありますが、逃げずに再利用?される数が1を超えるようになると、核分裂反応は持続します。連鎖反応と言います。この状態がギリギリ維持できる状態を臨界状態と言います。臨界状態は、中性子の逃げ易さ、密度、中性子の状態などで変わります。これを継続、または拡大するようにしたものが原爆であり原爆なのです。

原爆や原発の原料は重い元素です。原子核と言う袋がずっしりと重くなければなりません。しかし、重い

元素は放っておいても自然に壊れて消えてゆきます。寿命が長くないのです。全ての元素は地球が生まれる前に^{注5}作られました。そのうち寿命の短い原子は消えてしまいました。今利用できる元素はウランぐらいしかありません。あとは寿命が短いので消えてなくなりました。

そのウランですが、今まで生き残っているのは、原子量が238のウランと原子量が235のウランだけです。ウラン238が半分減る時間が45億年なのに比べ、7億年の235は早く減ります。地球の誕生から45億年経つうちにウラン235は早く無くなって、今ではウランの0.7%しか残っていません。そしてウラン235は原子力の材料になりますが238は核分裂が難しいので燃料にはなりません。爆弾を作るにも原発の燃料にするにも、燃えるウラン235を増やさなければなりません。

兵器は戦場までは運ばなければなりません。コンパクトにしなければならぬのです。そこで爆弾にするためには235を100%近くに濃縮しなければなりません。濃縮ウランです。ウラン235もウラン238と同じウラン元素です。化学的にはまったく同じです。ただ重さがわずかに違うだけです。濃縮はとても面倒です。

発電に使うにはそこまで濃縮する

必要はありません。大きさの制限無しに効率的な装置を作れるからです。兵器に流用されないため濃縮量は制限されていて5%まで濃縮されたものが使われます。

ウランウムの爆弾に利用するためには100%近い濃縮が必要です。これでは兵器として用意するのがとても面倒です。そこで目をつけたのがプルトニウムです。

原子炉に燃えないウラン238を入れると、核分裂で発生した高速の中性子を吸ってプルトニウムに変わります。このプルトニウム239はさらに中性子を吸ってプルトニウム240に変わります。この240は発熱も多く核分裂もしませんが強い放射線が出します。そのため原子炉の中で次第に増えてゆきます。核燃料を使い続けると燃えない240がどんどん増えてゆきます。

プルトニウムはウランと別の原子なので化学的に分離できます。しかし同じプルトニウムの239と240は同じ原子なので分離は困難です。そこで兵器としてのプルトニウムは240がまだ沢山出来ていない生焼きの使用済み燃料から化学処理で取り出します。世界の原爆はこれで作られました。

^{注4} 正確には1, 2, 3...と色々あるが平均すると2つちよっとになります。

^{注5} 超新星爆発で作られ、地球誕生の時取り込まれる

〈次号に続く〉

故 森山 軍治 郎 氏 (元 泊原発の廃炉をめざす会 事務局 長) 遺稿 連載 (10)

まだ懲りないのか 国も電力会社も (下)



2015年7月28日 勉強会で講演する森山氏

もうひとつの大きな問題がある。使用済み核燃料や核廃棄物の問題だ。これらは原発が稼働するかぎり増大し続ける。かりにいますぐすべての原発を止めたとしても、問題の解決には一〇万年単位の間が必要だ。

使用済み核燃料を再処理してプルトニウムを抽出する。長崎に投下された原爆のもとになった物質だ。原子数(威力)の半減期は二万四〇〇〇年だ。日本が英仏に依頼して抽出させたプルトニウムはすでに四五トンになる。

これは長崎原爆四〇〇〇発分にあたる。もしも六ヶ所村の再処理工場が稼働すると、国産のプルトニウムは毎年八トンずつ増えることになるという。

長崎原爆七〇〇発分ずつ増えていく計算だ。平和の問題としても忌むべきことだ。が、日本がこの物質をもっていることで、対外的に抑止力になっていると主張する人が岸信介以来あつた。表向きには、日本が余分なプルトニウムを保持することは国際協定で禁じられている。

だからか、核燃料サイクル方式が試みられる。この物質を使って高速増殖炉が「もんじゅ」を稼働させると、使用した以上のプルトニウムが生まれる。資源が資源を生む夢の原子炉だという。が、実験は失敗の連続で重大な事故を起こし、稼働の目処がたっていない。米仏はこの計画を断念している。

そこで登場したのがプルトニウム計画だ。プルトニウムにウランを混ぜMOXという燃料にしてウラン用の原発で使う。福島第一の三号炉で使用していた。専門家の小出裕章氏によると、猛烈に危険なことで、灯油用の石油ストーブの燃料としてガソリンを使うようなものだという。泊三号炉での実施を道が認め、大間原発では一〇〇パーセントこれで実施する予定でい



札幌地方裁判所

を進めていた。

ところが、泊のばあい、この計画を強引に進めるため、国も道も北電も「やらせ」をやっていた。危険を隠ぺいしてでも、国策と電力会社の安易な利益追求のために、計画を実行しようとした。

小出氏はプルトニウムを使用すべきではないし、使用済み核燃料も再処理しないほうが危険性は少ないという。

国の原子力政策を抜本的に見直すはずの「新大綱策定会議」では、これまでの核燃料サイクルを是認する意見も強い。最近の報道によれば、日本原燃は六ヶ所村の再処理工場の試験運転を再開するという。どう考えても、名実ともに破綻した核燃料サイクルをなぜ続けるのか。

細野原発大臣は原発の寿命を法的に四〇年にするといいながら、例外的に六〇年まではいいとする。「ザル法」もはなはだしい。政府のこんな姿勢をいって、停止中のあちこちの原発について、各電力会社は再稼働の申請に余念がない。それを保安院が認める方向で動いている。

作家の池澤夏樹がいつている。粗相をした飼犬に二度同じことをさせないために、首根っこをつかんでその犬の糞尿の前に鼻づらをつけてやる必要がある。フクシマ原発の事故を肝に銘じて忘れさせないために、国や電力会社に同じようにさせたい、というのだ。池澤さんも泊原発訴訟原告団のひとりだ。【完】
『MOCT』第31号2012年2月号から転載

次号から故森山軍治郎氏の遺稿「やっぱりのダメだ 国も電力会社も」(2013年7月)を掲載します。

訂正のお詫び

9号(9月24日発行)の2面滝本正雄氏の詩で1段目20行目「弁明を二度と許してはない」を「ならない」に訂正し、お詫びいたします。

会員紹介 福地保馬さん

ハイロ通信づくり、頑張ります。



本紙(北区ハイロ通信)で、「風声」などを担当しています。本号には、私の幼児期の経験と

思いを紹介させていただきました。私の、反核・反原発運動の原点です。中学校時代にクラブ活動として「新聞部」に入り、新聞づくりの楽しさを覚えました。以後、高校や大学、いろいろな活動団体でも新聞、ニュースづくりに関わってきています。北区の会で、ニュースを出そうと言うことになったときも、早速飛びつき編集担当に加わり今に至りました。

ニュースは、運動にとっても、最も大切な手段の一つです。泊ハイロの「声」を広め、反核・平和を願う「風」を起し強くすることを目指して、老骨にむち打ちながら、今後も頑張りたいと思います。どうかよろしく願います。



☆北区の会に入会ください。

北区の会に入って廃炉への活動をしましょう。

会費は年1口(千円)以上です。

申し込みは、下記にご連絡ください。

メール hairo.kitaku@gmail.com

電話(FAX) 011-726-7234

☆カンパをお願いします。

【ゆうちょ銀行 普通口座】

記号 19050 番号 55938131

口座名「泊原発の廃炉をめざす札幌北区の会」

読者からの投稿

原発の即時廃止！

安保法制違憲北海道訴訟

共同代表 弁護士 高崎 暢

「だれもが自分らしく暮らせる明日へ」と、この度の総選挙で市民連合と野党間での合意した共通政策は、私たちの進むべき道を示している

その共通政策では、「再生可能エネルギーを中心とした新しいエネルギー政策の確立と地域社会再生により、原発ゼロ実現を目指す」とうたわれている。もう一度確認しておきたい。いったん事故が起これば、命をはじめ取り返しのつかない被害をもたらす原発は直ちに廃止すること、これが、「3・11フクシマ」の最大の教訓である。この教訓を活かす政治を実現することである。

ささやかな節電のすすめ！

通産省は9月26日、今冬の電力需給について、ピーク時の需要に対する供給の余力を示す予備率が多く地域で3%台となり、「過去10年間で最も厳しい」との見通しを示したと、朝日新聞が報道した。

「冬の電力供給が厳しい。だから原発を」との布石と受け止めるのは考え過ぎだろうか。日頃からささやかでも節電に心がけている。軽石の漂流による原発事故も心配である。自然の力を侮ってはいけない。

賛同署名のお願い！

安保法制違憲北海道訴訟は、今年5月26日、札幌高裁で控訴棄却の判決が出され、継続する他の訴訟に与える影響を考え、やむを得ず上告を断念した。それで、集団的自衛権の行使を認める安保法制が合憲になったわけでもない。安保法制が憲法9条の平和主義を根底から覆し、この国を戦争の危険に晒している現状は全く変わらない。特に、これまで出された判決は、裁判所の本来の責務を放棄し、思考を停止し、コピペのような内容の判決が続いていることに危機感を覚えている。戦争に加担した戦前の裁判官を想起する。

そこで、安保法制違憲訴訟全国士ネットワークは、裁判官の独立と安保法制の違憲判決を求める緊急要請を発し、緊急要請賛同署名を始めた。この取り組みは、裁判所に違憲判決を求めると同時に、司法に本来の役割(立法・行政に対するチェック)を果たさせる運動である。

賛同者名簿を活用し、用意された方法で参加すること、メールや電話で呼びかけ、賛同を得た方の代わりに署名することも可能である。

是非、周りの方に一人でも多く広げ欲しい。署名用紙は申込んで下されば送ることができる。

先の共通政策には、憲法に基づく政治の回復、違憲な戦争法の廃棄も含まれている。この政策の実践として賛同署名を成功させたい。

【連絡先】 たかさき・渡部法律事務所 電話 011-261-7738

札幌市中央区大通西 10 丁目大通ビル新館 7F